

睡眠のばらつきと妊娠までの時間：妊娠を希望する女性を対象としたパイロットコホート研究の結果

Sleep variability and time to achieving pregnancy : findings from a pilot cohort study of women desiring pregnancy.

Zhao P et al

Fertil Steril 124 : 113-120, 2025

背景・目的 本研究は、妊娠を希望する女性において、睡眠習慣の規則性が妊娠成立に影響するかを検討したパイロットコホート研究である。睡眠と生殖機能には関連があるとされ、短い睡眠時間は妊孕性の低下や妊娠糖尿病、交代勤務は月経異常や不妊、早期閉経と関連することが報告されている。概日リズムの乱れ(chronodisruption)は糖尿病や心血管疾患、がんなどにも関与し、プロダクティブヘルスへの影響も示唆されている。しかし従来の研究は、自己申告や高額なポリソムノグラフィーに依存していた。

方法 本研究では、アクチグラフィーを用いて自然環境下での睡眠パターンを客観的に測定した。2015～2017年にかけて、米国中西部の大学医療センターにおいて妊娠を希望する183名の女性を対象に、2週間の睡眠・活動データを取得し、1年間追跡した。主要評価項目は妊

娠成立までの期間である。

結果 82人が中央値2.8カ月で妊娠に至った。年齢、BMI、人種、教育、収入、喫煙などを調整後、就寝時刻および睡眠時間の日々の変動が大きいほど妊娠までの期間が長いことが示された。就寝時刻の標準偏差が1.8時間超の群ではaHR 0.60(95%CI 0.36-0.999)、睡眠時間の標準偏差が2.3時間超の群ではaHR 0.58(95%CI 0.36-0.98)であった。一方、平均の就寝時刻・起床時刻・睡眠時間自体には有意な関連はみられなかった。

結論 “睡眠時間や就寝時刻の「変動性」”が妊娠成立までの期間延長と関連し、単に睡眠時間の長短では妊孕性への影響は認められなかった。規則正しい睡眠習慣の維持が、妊娠を希望する女性の生活改善の一助となる可能性が示唆された。

(近畿大学医学部産科婦人科学教室 山本貴子 抄)

子宮頸癌におけるセンチネルリンパ節生検単独と骨盤リンパ節郭清の比較試験(PHENIX試験)

Sentinel-lymph-node biopsy alone or with lymphadenectomy in cervical cancer.

Tu H et al

N Engl J Med 393 : 1463-1474, 2025

背景・目的 PHENIX試験は、早期子宮頸癌においてセンチネルリンパ節生検単独が骨盤リンパ節郭清に対して非劣性であるかを検証した、多施設共同ランダム化比較試験である。従来、郭清は標準手技とされてきたが、手術時間の延長やリンパ浮腫などの合併症を伴う。一方で、多くの早期症例ではリンパ節転移を認めず、非転移節の郭清は過剰治療となる可能性が指摘されている。

方法 本試験では、臨床進行期IA1(脈管侵襲陽性)～IIA1期(FIGO 2009)、腫瘍径3cm以下の患者838例を対象に、術中センチネルリンパ節生検で転移陰性と判定された症例を、生検単独群と郭清群に無作為に割り付けた。主要評価項目は3年無病生存率(DFS)であり、非劣性マージンは群間差の95%信頼区間の上限が5%以内と定義された。副次評価項目は後腹膜リンパ節再発、癌特異的生存率、手術成績、合併症であった。

結果 3年DFSは生検群96.9%、郭清群94.6%、群間

差-2.3%(95%CI -5.0～0.5)で、非劣性が確認された。後腹膜リンパ節再発は郭清群のみに9例みられ、生検群では認めなかった。術後合併症は生検群58.1%、郭清群71.3%で、特にリンパ浮腫(5.2%対19.1%)およびリンパ嚢胞(8.3%対22.0%)が有意に少なかった。感度分析は両側マッピング達成例、プロトコル違反のない例、補助放射線療法を行わなかった例で行われ、いずれも非劣性が維持された。

結論 本試験は、センチネルリンパ節生検単独が早期子宮頸癌手術における有効かつ安全な代替手技となりうることを示した。一方で、単一トレーサーの使用やウルトラステー징を必須としなかった点が限界として挙げられる。また、郭清群に後腹膜再発が多かったことから、再発機序に関するさらなる検討が求められる。

(近畿大学医学部産科婦人科学教室 高矢寿光 抄)